地域が育む「かごしまの教育」県民週間

かごしま遺跡フォーラム

新発見!! かごしまの遺跡 2024

上野原縄文の森企画展講演会

日時：令和６年11月２日（土）　会場：鹿児島県立図書館

鹿児島城二之丸跡（鹿児島市）

主催：鹿児島県立埋蔵文化財センター

（公財）鹿児島県文化振興財団 上野原縄文の森

共催：（公財）鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター

かごしま遺跡フォーラム 2024

～　新発見！　かごしまの遺跡 2024 上野原縄文の森企画展講演会～

日程

12：30～13：00　受付
13：00～13：05　開会のあいさつ
　　県立埋蔵文化財センター所長　中村和美
13：05～14：05　発掘調査成果報告
　　「廃寺は語る！　よみがえる鹿児島の仏教文化」
　　県立埋蔵文化財センター文化財主事　上浦麻矢
　　「六反ヶ丸遺跡」
　　（公財）埋蔵文化財調査センター文化財専門員　林田真一
　　「鹿児島城二之丸跡」
　　県立埋蔵文化財センター文化財主事　星野清
14：05～14：15　質疑応答
14：15～14：30　休憩
14：30～14：35　上野原縄文の森あいさつ
　　（公財）上野原縄文の森園長　前迫亮一
14：35～14：55　展示館リニューアルオープンについて
　　（公財）上野原縄文の森主任学芸員　古江真美
14：55～15：15　整理作業成果報告
　　「諏訪ノ前遺跡」
　　（公財）埋蔵文化財調査センター文化財専門員　松山初音
15：15～15：35　事業報告
　　「南の縄文文化魅力発信事業」
　　県立埋蔵文化財センター第一調査係長　平美典
15：35～15：50　質疑応答
15：50～15：55　閉会のあいさつ
　　（公財）埋蔵文化財調査センター長　寺原徹

ホームページ	Facebook	Instagram
鹿児島県立埋蔵文化財センター	鹿児島県立埋蔵文化財センターFacebook	鹿児島県立埋蔵文化財センターInstagram

資料集目次

「廃寺は語る！　よみがえる鹿児島の仏教文化」　・・・・・・・・・・　２

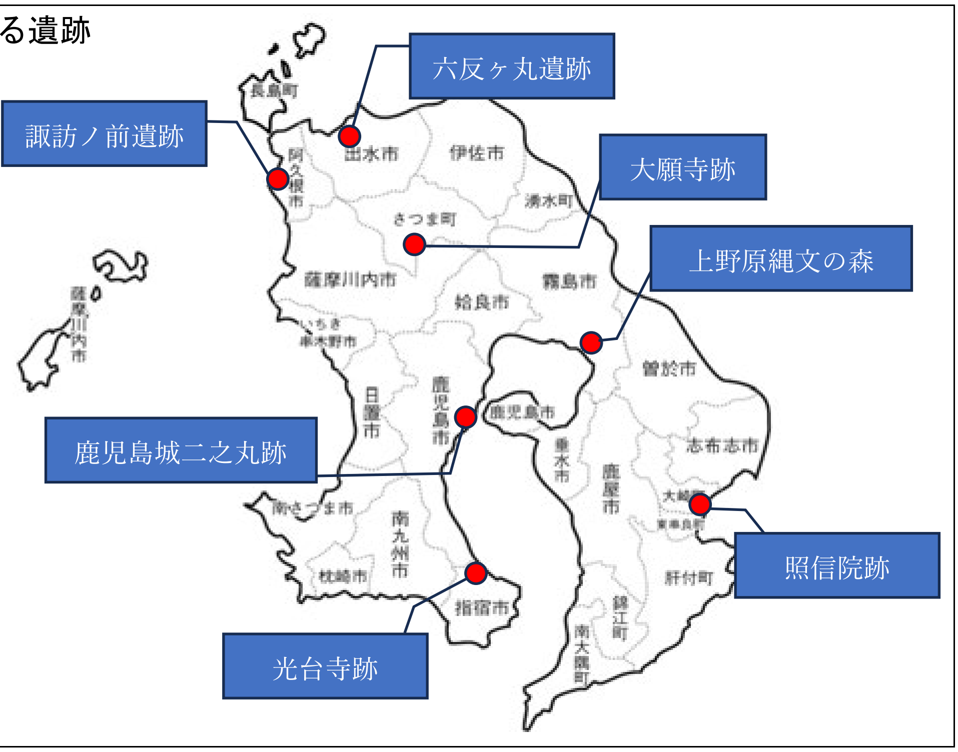
「六反ヶ丸遺跡」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10

「鹿児島城二之丸跡」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　14

「諏訪ノ前遺跡」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　22

「南の縄文文化魅力発信事業」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　26

今回紹介する遺跡



【お願い】

・　フォーラム中は，携帯電話の電源を切るかマナーモードに設定してください。

・　室内での通話はご遠慮ください。

・　フォーラム中のカメラ撮影・ビデオ撮影もご遠慮ください。

・　お帰りの際は，アンケート提出にご協力ください。

「廃寺は語る！よみがえる鹿児島の仏教文化事業」について

光台寺跡・照信院跡・大願寺跡

（指宿市岩本・曽於郡大崎町神領・薩摩郡さつま町柏原）

県立埋蔵文化財センター　文化財主事　上浦　麻矢

１　はじめに

幕末維新期，薩摩藩は，寺院・仏像の破壊，経典・仏具の焼却を求めるなど廃仏を断行し，鹿児島では，すべての寺院が破壊され，鹿児島の仏教文化は大きなダメージを受けることとなりました。

鹿児島県立埋蔵文化財センターでは，近代化の流れの中で行われた「廃仏毀釈」に光をあてるとともに，それ以前に何らかの理由で廃寺となっていった寺院の実態解明を目的として，令和３～５年度まで「廃寺は語る！よみがえる鹿児島の仏教文化事業」を実施しました。令和３年度は近世島津氏一門家である今和泉島津家の菩提寺である光台寺跡（指宿市）を，令和４年度は大隅半島にあり，残存状況が良好で天台修験の代表的な寺院である照信院跡（大崎町）の発掘調査を行いました。令和５年度は，廃仏毀釈以前にすでに廃寺となっていた寺院として大願寺跡（さつま町）の発掘調査を行い，３年間のまとめとして報告書作成を行いました。今回は事業の成果について報告いたします。

２　光台寺跡

⑴　光台寺跡の位置とその周辺の環境

光台寺跡は，指宿市岩本にあります。北は，鹿児島湾が広がり，今和泉漁港など海沿いに面した立地です。遺跡の北を北西から南東方向に国道 226 号線が通り，北西にはＪＲ薩摩今和泉駅があります。遺跡北西方向には今和泉家屋敷跡，東側には今和泉島津家墓所があります。今和泉島津家墓所には，今和泉家初代の忠卿から６代忠冬とその一族が葬られています。なお，今和泉島津家墓所は，令和２年３月に島津家宗家・越前（重富）・加治木・垂水・宮之城島津家墓所とともに，鹿児島島津家墓所として国史跡に指定されています。

図１　光台寺跡位置図

⑵　光台寺跡略史

和泉家は，島津家４大当主忠宗の子，忠氏を初代として５代直久まで続きましたが，直久が応永 24（1417）年の川辺城の戦いで戦死したために和泉家は断絶しました。延享元

（1744）年，島津家 21 代当主（４代藩主）吉貴の命を受け，吉貴の七男である忠卿が和泉家の名跡を相続して，今和泉島津家を創設しました。光台寺は，この今和泉島津家の菩提寺です。『三国名勝図会』によれば，正式名称を道熙山壽祥院光台寺といい，延享２（1745）年第４代藩主吉貴が建立を命じ，宝暦７（1757）年，第５代藩主継豊の代に現指宿市西方宮ヶ浜にあった安泰山源忠寺の末寺西光寺を曹洞宗から時宗に改めて移設し，水引（薩摩川内市）にあった光台寺の屋号をとって創建したとされています。開山僧は，鹿児島の浄光明寺 21 世の廓心上人で，本尊を『三国名勝図会』では，阿弥陀如来とあり，天保 13（1842）年にまとめられた『藤澤山衆領軒』には，釈迦如来，文殊菩薩，普賢菩薩の３体であったとされています。その後，光台寺も明治２（1869）年の廃仏毀釈によって廃寺となりました。

(3) 調査の成果

光台寺跡の主な成果としては，近世の遺構として，石垣，土坑１基，ピット１基が検出され，主な遺物として，瓦や陶磁器が出土しました。ただし，建物跡は検出できず，調査区において光台寺の位置特定には至りませんでした。しかし，周辺住民への聞き取りによると，今和泉島津家墓所に隣接するＨ～Ｉ－４区には，築山や多くの陶磁器が出土した池があり，Ｅ～Ｇ－２～４区付近には，かつて墓守を行っていた大きな屋敷があったということが分かりました。そのことから光台寺に関する建物は，調査区と今和泉島津家墓所の間にあった可能性が高まりました。

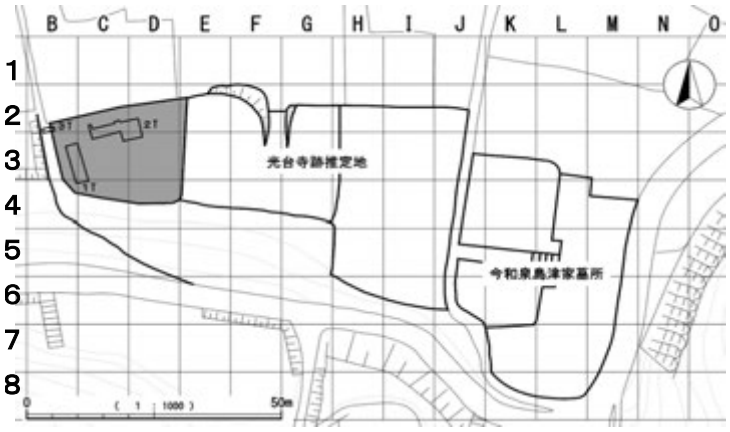


図２　光台寺跡推定地及びトレンチ配置図

また，調査区の北側には石垣があり，今回調査した部分以外は後世の土地改変等のため損壊，改変されており，ほとんど残存していないものの，周辺の状況から光台寺創建時には，調査を行った場所から今和泉島津家墓所に隣接する部分まで建物があった可能性があります。石垣は，上下で積み方が異なり，下２段は数カ所において間知石や亀甲崩し積みが確認できることから，当時のものであると判断しました（第３図）。

図３　石垣実測図

遺物では，約 220 点中刻印瓦が２点（丸瓦「休」，桟瓦「八」）出土しており，そのうち「休」の刻印は，鹿児島城跡でも出土しています。また，陶器は青磁や白磁，琉球陶器の小片も出土していますが，主として 18～19 世紀の碗や土瓶，擂鉢が出土しており，光台寺が創建された時期と重なる遺物が出土しています。

２　照信院跡

(1) 照信院跡の位置とその周辺の環境

照信院跡は，曽於郡大崎町神領にあります。田原川の左岸にあり，飯隈台地の南西部縁辺部に位置しています。標高約 33mで，志布志湾から直線距離で約 2.4km のところになります。田原川左岸の飯隈台地には，飯隈遺跡群といわれる古代以降の飯隈山の寺院に関する石塔群や墓所・飯隈が存在し，現在でも熊野神社周辺の地域を「○○坊」と呼んでおり，中・近世においても歴史的に重要な地域であったことがうかがえます。

図４　照信院跡位置図

また，古墳も９基確認されており，鷲塚山では多数の地下式横穴墓が確認されています。

(2) 照信院跡略史

和同元（708）年に修験道開祖役小角の弟子である義覚が飯隈山を開山し，新熊野三社権現を勧請し，本地阿弥・薬師・観音の三尊を安置したことが由来とされています。天平 15（743）年に聖武天皇の勅願所の宣旨を受け，神領の地一千石を支給されたと伝えられています。中世以降も本山派修験の京都天台宗聖護院の末寺として，聖護院や近衛家などの中央勢力や，島津各代の藩主と深く関わり南九州最大の修験道場として君臨したとされています。しかし，廃仏毀釈で飯隈山の寺院は破壊し尽くされ，長く続いた聖域は完全に失われてしまいました。現在は，大部分が住宅地や農地になっており，飯隈山飯福寺照信院本社跡に熊野神社が残っています。

図５　照信院跡　トレンチ配置図

(3) 調査の成果

照信院跡の主な成果は，遺構として土坑６基，溝状遺構３条，ピット 12 基，かまど状遺構１基，造成面及び造成土，版築，造成土（礫敷）が検出されています。

また，遺物としては，青磁，備前焼，土師器，陶磁器，青銅製品，寛永通宝，玉石，軽石製品が出土しています。

７トレンチで確認された溝状遺構を境にして，礫敷の面の有無が確認されました。礫敷が玉砂利だとすると，礫敷側が寺院の建物域であり，溝状遺構は寺院と他の区域を分けるものであると考えられます（図６）。８トレンチからも同様に礫敷と溝状遺構が確認されたことから，絵図にある回廊またはそれに付随するものとして，その区画の範囲を確認することができました。

また，約650点の遺物が出土し，近世の遺物は，照信院で使用されていたであろう，仏花器や香炉などの仏具が出土しています。その中で，特質とされるのが，華瓶（けびょう）になります（図８）。華瓶は，銅鏡や鏡を擬した鏡板に，線刻や彩色で仏像・神像を表した鏡像，鏡板に立体的な仏像・神像を取り付けた懸仏（かけぼとけ）の仏像横の装飾です（参考：図９）。礼拝の対象であった懸仏の一部である華瓶が，３トレンチの廃棄土坑の中から出土しており，廃仏毀釈により廃棄されたものであると考えられます。

図６　礫敷き・溝状遺構

図７　照信院跡三国名勝図会　四巻

図８　華瓶

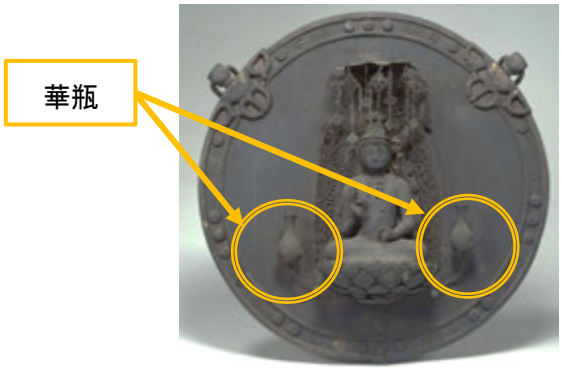


図９　重要文化財：聖観音懸仏
（東京国立博物館デジタルコンテンツから引用）

３　大願寺跡

(1) 大願寺跡の位置とその周辺の環境

大願寺跡は，薩摩郡さつま町柏原にあります。旧鶴田町南部にあり，川内川右岸を通る国道 267 号線沿いの長岡原台地の北端，標高 52～53m 前後の河岸段丘縁辺に位置します。すぐ北を川内川支流で紫尾山塊にその源を発する夜星川が南東へ流れ，大願寺跡南西の平野部で，夜星川と川内川が合流します。現在も大願寺に関する鐘撞き堂や多くの石塔群が周辺に存在し，集落名も大願寺地区として名前が残っていることから，廃寺となった後も人々にとって重要な地域であったことがうかがえます。

図 10　大願寺跡位置図

(2) 大願寺跡略史

大願寺跡は，薩摩の臨済宗の五山，十刹，諸山のうち，諸山に位置します。『祁答院記』によると貞治３（1364）年渋谷系祁答院氏の重成により一関宗万を開山，起宗和尚を初住として創建され，その後祁答院氏の菩提寺になったとされています。『三国名勝図会』には 12 の坊舎がある大変大きな寺院であったとあり，本堂には，足利義満自筆の「醫王寶殿（いおうほうでん）」の扁額（へんがく）を掲げるなど，将軍家と祁答院氏の親密さがうかがえます。大願寺の廃寺の時期は，はっきりと明示されていませんが，祁答院氏が衰退するとともに，菩提寺であった大願寺も江戸時代初期には廃寺となったと考えられます。

『三国名勝図会』が編纂された近世後期には，薬師堂のみが残っていたとの記載があります。盛衰を繰り返した大願寺は，禅宗の道場となった後，衰微した際には「醫王寶殿」

の扁額は，薩摩川内市の水引の泰平寺に移され，さらに薩摩藩主島津光久の時代に鹿児島城下に建てられた東照宮別当寺大願寺の本堂に掲げられたとあります。現在は，日吉町の妙信寺本堂に掲げられています。

(3) 調査成果

大願寺跡の主な調査成果としては，中世・近世の遺構として，溝状遺構９条と帯状硬化面４条，土坑１基，ピット１基が検出され，遺物として青磁，染付（青花），薩摩焼（龍門司），火打石が出土しています。

建物の跡は確認できませんでしたが，わずかに残る中世・近世相当層で川内川に面した台地縁辺に並行するように，重なりながら延びる溝状遺構及び硬化面が確認できたことから，何らかの土地利用があったことがうかがえます。石造物の年代を確定するのは難しいと思われますが，大願寺は脇寺が 12 ある寺院であり，調査区に隣接する鐘撞き堂（図 12）をはじめ，県指定史跡となっている薬師堂跡，開山堂跡，他石塔群があり，調査区周辺にも多くの石造物が点在しています。このことから，大願寺は川内川から一段上がった低地部から今回調査対象地である台地部へと広範囲にわたっていたと考えられます(図 13)。

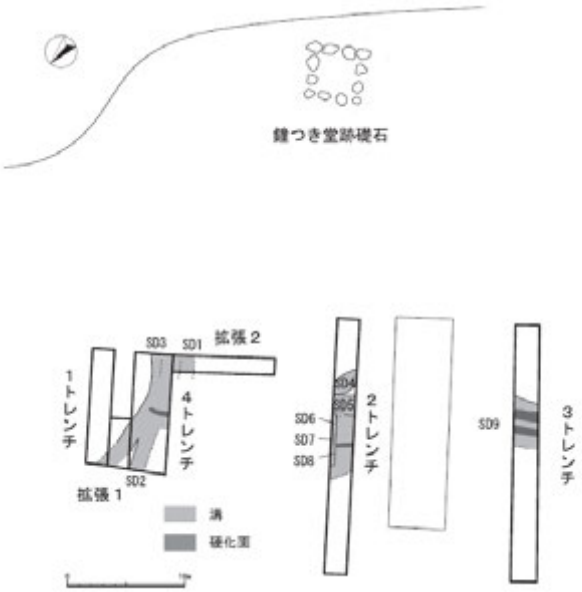


図 11　大願寺トレンチ配置図及び溝状遺構・帯状硬化面実測図

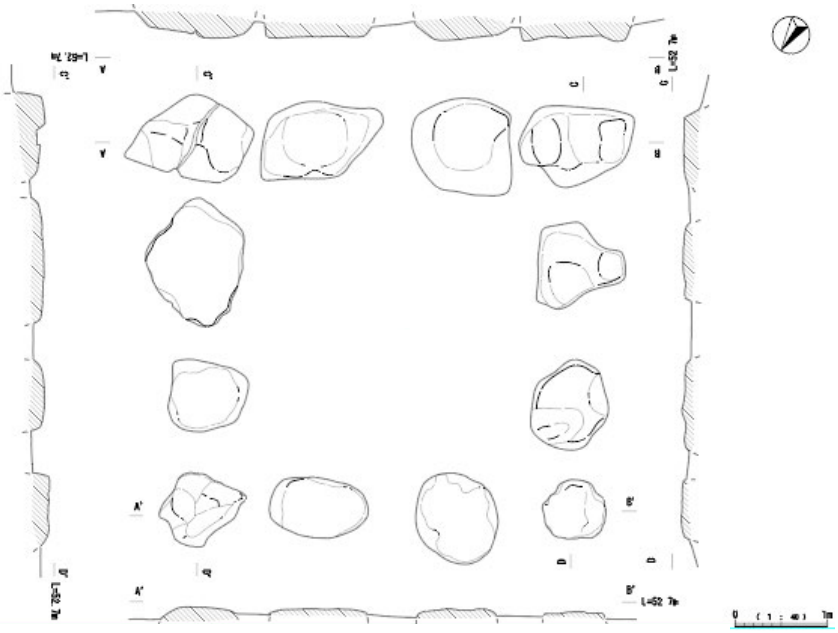


図 12　鐘撞き堂跡実測図

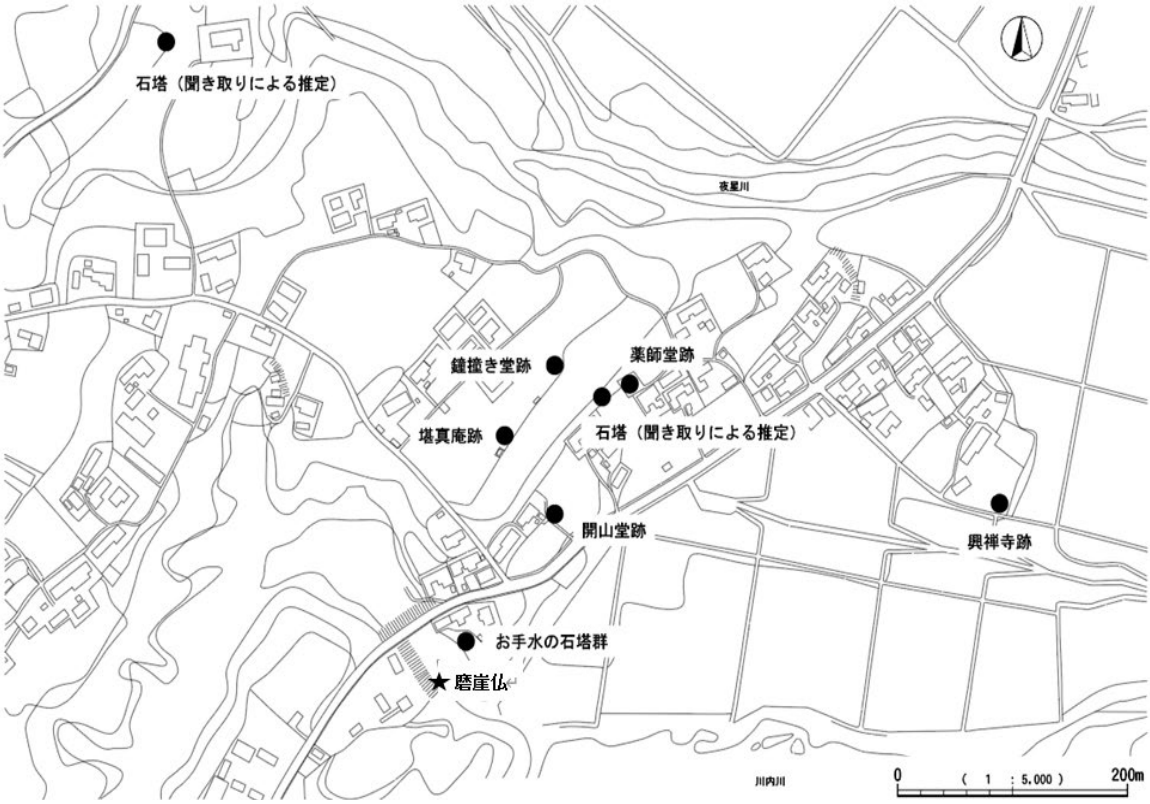


図 13　大願寺跡周辺図

4　おわりに

今回の事業で，廃寺となった寺院や廃仏毀釈以前の寺院の様子について情報を得ることは難しいと考えていましたが，発掘調査，文献調査，現地踏査を組み合わせた調査を行うことで，遺跡や周辺の寺院に関連する情報を得ることができ，地域に残る資料は貴重な情報源となりました。廃仏毀釈により廃寺となった光台寺跡，照信院跡は，『三国名勝図会』や『藤澤山衆領軒』などの文献に絵図が残り，参考に調査を進めることもできました。事業を実施していくなかで，関係する３市町の方々に多くの協力いただき，発掘調査や石造物の踏査は，多くの土地所有者の理解や市町村担当者の協力を得て実施することができました。

鹿児島県では，1066 ヶ寺が廃仏毀釈によって廃寺になったとされており，近世以前の寺院に関する建造物は，さつま町の興詮寺にその一部が現存する以外，全て破壊されています。このため，建物の規模や配置などは，残された絵図や文書等の歴史史料，現存する石垣や石塔などの石造物によって推察するしかなく，発掘調査は，建物の基礎などの遺構が検出されることで，それを知るための有効な手段となります。文献調査，現地踏査と発掘調査を組み合わせて実施し，廃寺となった土地の来歴を明らかにしていくことが重要であると考えます。

【参考史料】

『大崎名勝誌』

『祁答院記』

『三国名勝図会』

『藤澤山衆領軒』

『本山修験飯隈山蓮光院史料』

【参考文献】

市来四郎　1893「薩摩にて寺院を配し神社を合祭せし事実」『史談会速記録』第 13 輯

鹿児島県　1941『鹿児島県史』第３巻・第４巻

鶴田町郷土史編纂委員会　1979『鶴田町史』

安丸良夫　1979『神々の明治維新』

鹿児島市教育委員会　1991『鹿児島寺院跡―近世寺院跡調査報告書―』鹿児島市文化寺報告書（７）

宮之城町史編纂委員会　2000『宮之城町史』

指宿市考古博物館時遊館 Cocco はしむれ編　2002『指宿市考古博物館・自由感 Cocco はしむれ　第８回企画展示図録』

名護　護　2011『鹿児島藩の廃仏毀釈』

秋吉龍敏　2013『薩摩の廃仏毀釈』（一）敬天愛人第 31 号

秋吉龍敏　2014『薩摩の廃仏毀釈』（二）敬天愛人第 32 号

指宿市教育委員会　2019『今和泉島津家墓地埋蔵文化財センター発掘調査報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（62）

栗林文夫　2022「薩摩藩の廃寺数は一〇六六ヶ寺か」『日本歴史』第 888 号　日本歴史学会編集

吉川弘文館

栗林文夫　2022「序論　問題の所在と中世南九州の社寺研究」『中世南九州の寺社と地域社会』

戎光祥出版

日隈正守　2022「解題」『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　神社調１』鹿児島県歴史・美術センター黎明館

六反ヶ丸遺跡（Ｅ地点）の発掘調査成果

（出水市六月田町）

（公財）埋蔵文化財調査センター　文化財専門員　林田真一

１　はじめに

六反ヶ丸遺跡は，南九州西回り自動車道（芦北出水道路）の建設事業に伴って，令和４年度に実施された出水市六月田町六月田下に所在する遺跡です。

本遺跡は，出水平野を流れる米ノ津川の右岸，標高６ｍの自然堤防上に位置する弥生時代～近代までの複合遺跡であり，発掘調査により発見された遺構・遺物は，当時の人々の生活及び地域の歴史を知る上で貴重な資料となりました。

図１　六反ヶ丸遺跡位置図（出水市）

２　六反ヶ丸遺跡の位置とその周辺の環境

六反ヶ丸遺跡は，米ノ津川の下流域の右岸に位置します。この付近は米ノ津面と呼ばれる沖積地が発達しています。下流域では，氾濫原により沖積低地が発達し，鹿児島県内でも有数の穀倉地帯となっています。さらに，河口付近には三角州や海岸平野も見られ，遠浅な海岸部は江戸時代から干拓が行われ，現在の水田地帯となっています。なかでも，荒崎地区は国の特別天然記念物として指定されているツルの越冬地として有名です。

本遺跡は，六月田付近で蛇行する米ノ津川の自然堤防上に形成された遺跡で，周辺の標高は６ｍ前後です。遺跡の所在する「六月田」という字について『出水郷土誌』では，柳田國男『地名の研究』によると「信仰上の用途に指定された耕地の名」といわれ，「毎年其日に祭を営む社があって其日の費用を弁ずる為に設けられた田の所在である」とすれば，六月田付近に「社」があったことが予想され，その歴史が古くなる可能性を指摘しています。

現在，遺跡周辺には集落が形成され，遺跡の東側には米ノ津川と並行するように国道 447 号が走り，大型店舗が立ち並んでいます。

３　歴史的環境

出水の地名が文献資料に明記されるのは，『続日本紀』です。奈良時代後期の宝亀９（778）年 11 月の条に，遣唐使船が出水海岸に漂着したとされています。その後『和名類聚抄』に「伊豆美」とあり，『薩摩国建久図田帳』に「和泉郡」として登場します。平安時代には，和泉郡の一部が山門院となりました。文治元（1185）年，島津忠久は島津荘下司職となり，翌年総地頭職に補任されました。

室町から戦国時代にかけては薩州島津家の領地となり，その後，一時豊臣秀吉の直轄地にもなりましたが，秀吉の死後，出水は島津本家の領地となり，藩政期には，島津家の外城制度の下に藩境地としての政治的要所の性格を強め，藩内外から派遣された郷士が居を構える鹿児島県内でも最大規模の武家屋敷等の集中地である「麓」を形成するに至ります。麓を構成する武家集落は現在も受け継がれ，平成７年に国の重要伝統的建設物群保存地区に指定され，令和元年には「薩摩の武士が生きた町」として日本遺産に認定されました。

４　六反ヶ丸遺跡発掘調査の成果

(1)　調査の概要

令和４年度に発掘調査を行った六反ヶ丸遺跡Ｅ地点は，標高６ｍほどの微高地で，米ノ津川の自然堤防と後背湿地の境目にあたります。隣接地のＣ・Ｄ地点においては，古墳時代の竪穴建物跡が検出されましたが，Ｅ地点では検出されなかったため，Ｄ地点が集落の端にあたると考えられます。さらに，Ｅ地点の中央東よりでみられた段状地形を境にして東側の地形が落ち込みます。

Ｅ地点における各時代の遺構や遺物は，Ｃ・Ｄ地点と比べると，遺構数も出土量も少ないです。しかし，東側の下層確認調査において，多数の木製品や自然木，種子類が出土し，併せて弥生や古墳時代の土器も数十点出土しました。これまでの発掘調査においては，縄文時代から近代まで連綿と遺物は出土していますが，Ｅ地点の主体となる時期は弥生時代中・後期と古墳時代・古代です。

(2)　注目される調査成果

六反ヶ丸遺跡 調査成果一覧

時代・時期	遺　　構	遺　　物
弥生時代中期	水場遺構１基	弥生土器（黒髪式土器系） 丸木弓，装飾木製品，木製品等
古墳時代	土器溜１基・ピット 13 基	東原・笹貫式土器，肥後系土器
古代～中世	段状地形１条	須恵器（甕・瓶等），土師器（皿・坏等），墨書土器，土錘，陶磁器
時代不詳	ピット１基	

①　弥生時代中期前半

調査区東側の下層確認を行った結果，Ⅶ層（礫層）下位の黒色腐植土から丸木弓が出土したため，約 96 ㎡の追加調査を実施しました。その結果，Ⅶ層下位に堆積した黒色腐植土（Ⅷ層）からは，流れ込んだと考えられる自然木や木製品，イスノキ製の弓，装飾木製品等が出土し，その近辺では比較的大きめの黒髪式土器の破片が出土しました。自然木の中には一部加工痕のようなものが残るものも確認できました。Ⅶ層は後背湿地の端にあり，自然科

学分析の結果から，比較的きれいな水が流れる水溜まり状の地形であった可能性が高いです。また，水田としての利用はなく，日本で最も堅い樹種を用いた弓が出土したこと，Ⅶ層から十数個の桃の種子が出土したことを考えると，祭祀にまつわる場所である可能性が高いです。そのように考えると，用途不明の装飾木製品も祭祀用の何かであると推察できます。なお，Ⅷ層下の橙色礫まで到達すると遺物や自然木がほぼ出土しなくなったため，調査終了としました。

図２　弓関係集合写真

②　古墳時代

古墳時代では，調査区西端に土器が集中している区域が見られました。層の堆積や遺物の出土状況，土器の摩耗具合から自然地形の窪みに土器や礫が流れ込み堆積した可能性が高いと判断しました。ただし，窪地へ土器を廃棄した可能性も考えられるため，「土器溜」として図面や写真等の記録を行いました。土器溜の床面からは，用途不明のピット群が 13 基見つかりました。整理作業を進める中で，標高が低いこと，その場所が流路であった可能性が高いことから，水場に関する簡易的な施設があったと考えられます。

遺物は，東原・笹貫式土器をはじめ肥後系土器などが出土しており，在地系土器と外来系土器の双方が確認できました。調査区全域に土器小片が出土していますが，残存状況の良い土器片及び出土量の多くは土器溜にほぼ集中しています。

③　古代

古代の遺構は段状地形が検出され，Ｖｃ層，Ⅵ層上部及びⅦ層直上で残存状況の良い須恵器及び土師器，墨書土器等が出土しました。段状地形については，これまでの調査区の断面図や，堆積土の状況から流路である可能性があります。また，自然科学分析の結果より水田の利用はされていなかったことから，条里水田に関わる可能性は低くなりました。（水田としての利用は東側ではⅣ層，西側はⅢ層よりも上層で認められました。）

図３　墨書土器

墨書土器は南北に延びる段状地形に沿うように出土し，底部に「九」・「志」・「宮人」の文字が書かれていました。墨書土器はいずれも９世紀初頭のものと考えられ，その他の須恵器や土師器もおよそ８～９世紀前半頃に比定されました。須恵器には，熊本県の宇城産（埦）が含まれていました。なお，Ｆ-41 区のＶ層より下では須恵器・土師器片とともに土錘が集中して出土しました。

５　おわりに

六反ヶ丸遺跡は，米ノ津川の自然堤防上にできた集落遺跡であり，幾度となく河川の氾濫に遭遇し，その度に集落を再構築して生活を営んできた痕跡が，発掘調査においても色濃く残っていることがうかがえました。

特に，Ｅ地点の発掘調査においては，弥生時代中期前半の弓をはじめとした木製品，熊本県が指標となる黒髪式土器の出土など，鹿児島県ではあまり発見されない遺物が出土しました。このことは，六反ヶ丸遺跡の地形や成り立ち等，全体を考える上でも大きな成果となりました。

【引用・参考文献】

岡安光彦 2015『日本考古学』第 39 号掲載「原始和弓の起源」

山田昌久 2023『考古資料大観第８巻』小学館

鹿児島県公益財団法人埋蔵文化財調査センター

2020『六反ヶ丸遺跡１-Ａ地点-』発掘調査報告書（29）

2021『六反ヶ丸遺跡２-Ｂ地点-』発掘調査報告書（40）

2022『六反ヶ丸遺跡３-Ｃ・Ｄ地点-』発掘調査報告書（42）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2003『楠元・城下遺跡』発掘調査報告書（57）

2005『京田遺跡』発掘調査報告書（81）

2011『南下遺跡』発掘調査報告書（157）

2022『中津野遺跡』発掘調査報告書３（217）

鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1994『鹿児島大学構内遺跡』埋蔵 文化財発掘調査報告書

福岡市教育委員会

1987『四箇遺跡』埋蔵文化財調査報告書（172）

1991『今宿五郎江遺跡Ⅱ』埋蔵文化財調査報告書（238）

2003『雀居９』埋蔵文化財調査報告書（748）

2010『今宿五郎江８』埋蔵文化財調査報告書（1066）

2010『笠抜遺跡２』埋蔵文化財調査報告書（1071）

2018『元岡・桑原遺跡群 29』発掘調査報告書（1354）

佐賀県教育委員会

2003『吉野ヶ里遺跡』文化財調査報告書（156）

2020『吉野ヶ里遺跡』文化財調査報告書（227）

唐津市教育委員会 1982『菜畑遺跡』文化財調査報告書（５）

長崎県教育委員会 1995『原の辻遺跡』文化財調査報告書（124）

長崎県田平町教育委員会 1988『里田原』田平町文化財調査報告 書第３集

熊本県教育委員会

2004『柳町遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告（218）

2007『島田遺跡』熊本県文化財調査報告（241）

熊本市教育委員会

2022『上代町遺跡群』熊本市の文化財（107）

鹿児島城二之丸跡の発掘調査成果

（鹿児島市城山町）
県立埋蔵文化財センター　文化財主事　星野　清

１　はじめに

県立埋蔵文化財センターでは，環境保健センター城山庁舎跡地文化財調査事業に伴い，令和５年８月～１０月にかけて鹿児島城二之丸跡の発掘調査を行いました。調査区は鹿児島城二之丸跡の南端にあたり，調査面積は約 800 ㎡です。今までの建物等で掘削されている部分も多かったですが，近世や近代の遺構や遺物が出土しました。特に注目される遺物としては，将棋盤と考えられる木製品が出土しており，近世から近代の鹿児島城や城下町の人々の暮らしや文化を知る上でも貴重な資料になると考えられます。

２　遺跡の位置とその周辺の環境

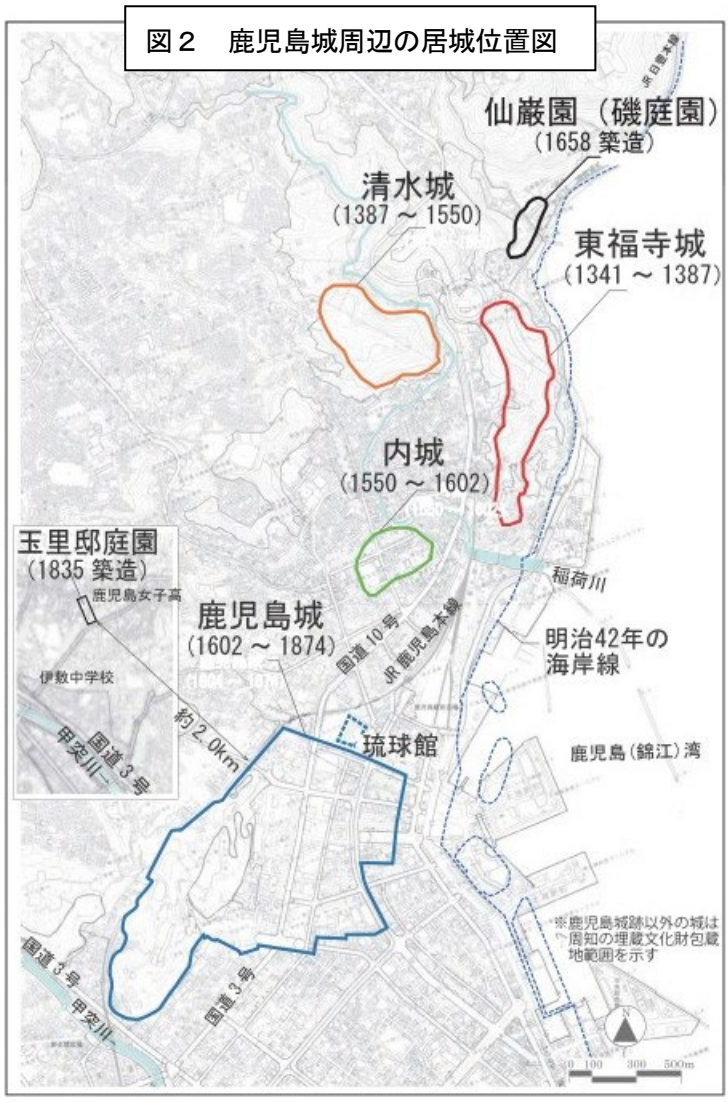
鹿児島城二之丸跡は鹿児島市城山町に所在しています。城山町は鹿児島市の中心部にあり，町内には県立図書館，県立博物館，県歴史・美術センター黎明館，鹿児島市立美術館などの文化施設があり，隣接地には鹿児島市役所や国の出先機関など，公共施設が多く建ち並ぶ地域です。鹿児島城は本丸が約 11m，二之丸が約８ｍ，御楼門が約５ｍの標高で，緩やかな段丘地に立地しています。周囲は堀で囲まれ，東側に鹿児島湾を望み，背後に城山を擁するという自然地形を巧みに生かした城づくりが成されています。

図１　調査位置図

３　中世の鹿児島城下

島津氏は初代から３代までは鎌倉在住の守護職でした。５代島津貞久が現在の鹿児島市に入り，その後，守護大名から実質的に薩摩・大隅・日向三国を支配する戦国大名となっています。５代貞久の頃の鹿児島は郡司の矢上氏や長谷場氏によって支配されていました。貞久は1341 年，鹿児島郡司矢上高純の東福寺城（現在の鹿児島市清水町多賀山公園）を降し，居城としたことで島津氏の鹿児島進出が始まりました。東福寺城には1343～1387 年の 44 年間居城しています。東福寺城は海に面した要害の城として重要な城でしたが，居館や城下町を形成するには狭い地形でした。そこで1387 年，７代元久が向かい側の楠木川（稲荷川上流）を隔てた北西の丘陵に清水城を築き，麓には居館が置かれました（現在の鹿児島市立清水中学校あたり）。島津氏は清水城を 1387～1550 年の 163 年間本城としました。1550 年に 15 代島津貴久が現在の鹿児島市立大龍小学校のあたりに内城を築き，1550～1602 年の 52 年間本城としました。内城は，薩摩・大隅・日向の三州統一及び九州一円の制覇を目指す拠点として，交通の利便性や城下町形成に有利でしたが，防衛機能が乏しく一重の堀を巡らせた程度でした。そのため，関ヶ原の敗戦を機に移転問題が表面化しました。そこで薩摩藩初代藩主忠恒（のちの家久）は，城山の山上に築かれた山城（上山城）及び麓に鹿児島城を築くこととしました。上山城はほぼ現在の城山の範囲にあり，家久は上山城の曲輪を生かしながら，本丸曲輪，二之丸曲輪を整えたと考えられています。

図２　鹿児島城周辺の居城位置図



４　近世の鹿児島城下

鹿児島城の築城年については，慶長６（1601）年説あるいは慶長７（1602）年説と諸説あり，資料によって異なっていますが，関ヶ原の戦い直後であるということは言えるようです（『鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画』「２　鹿児島（鶴丸）城跡の論考　①築城年について」より抜粋）。鹿児島城は，18 代（初代藩主）島津家久によって築城されました。山城（城山）と麓の居館（平城）からなる平山城でした。築城時直後は全体を上山城と呼んでいました。家久が家康に従うと

すぐに島津氏の本城として江戸幕府に承認され，当時幕府は本城を地域名で呼んでいたので，鹿児島城という名称になりました。合戦への備えを優先して構想されており，山城部分に曲輪が整備され，山の上に本丸と二之丸が置かれ，麓には屋形を創設しました。やがて領国統治対策が主になると，その中心は山麓の居館部分に移り，居館部が本丸，二之丸と称されるようになりました。鹿児島城は，近世を通じて薩摩藩の藩政の中枢として機能してきましたが，1871 年に廃藩置県により廃城となり，29 代忠義が本丸を去ることとなりました。後には鎮西鎮台第２分営が設置されました。1873 年の火災で本丸は焼失してしまい，御楼門もこの時に焼失したとされています。1877 年には二之丸が西南戦争で焼失しました。西南戦争の最後の戦地となった鹿児島城の石塀及び石垣には，官軍から受けた砲弾や銃弾痕が多く残っています。

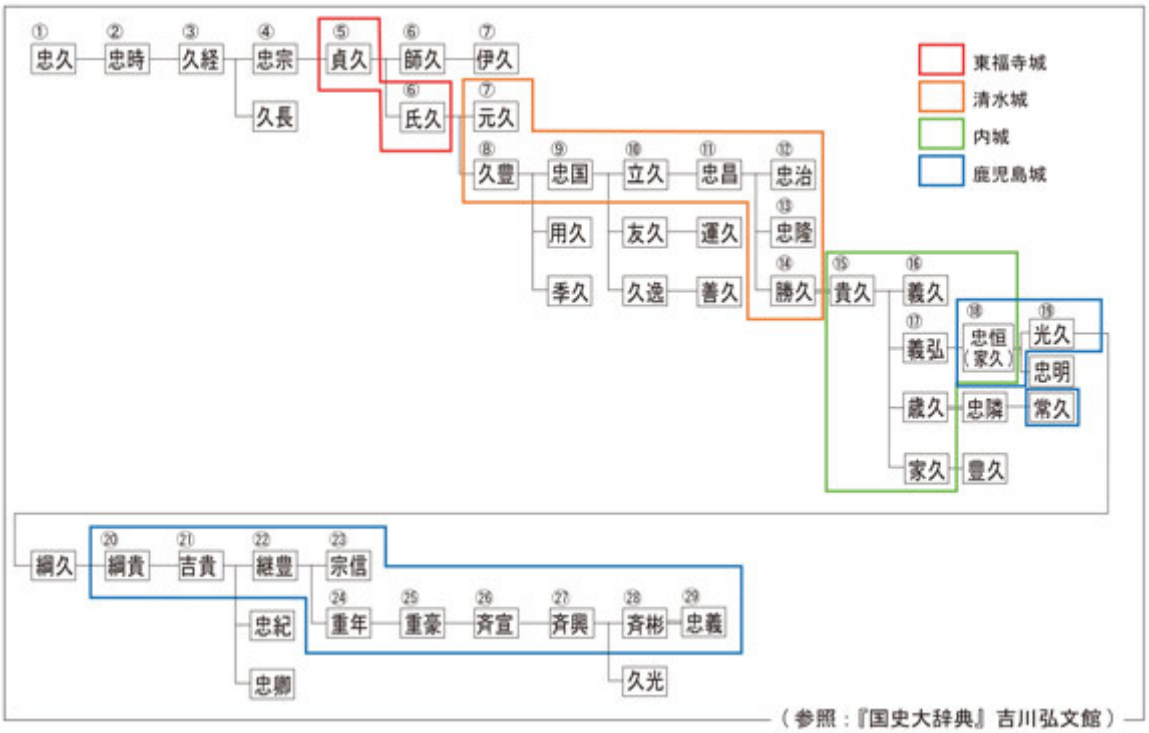
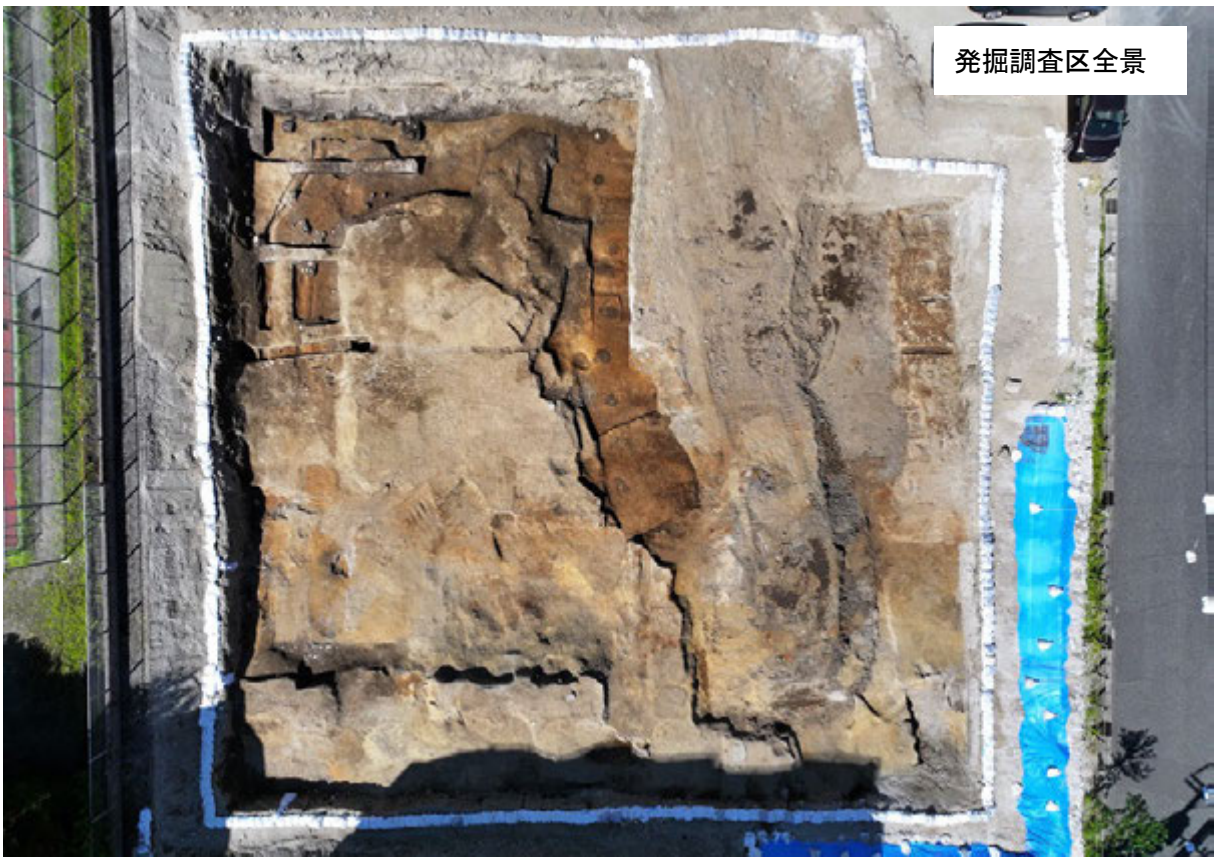


図３　島津家家系図

４　発掘調査の成果

表１　基本層位

	時期	特徴		層厚
Ⅰ層	表土	表土	旧環境保健センター建物建て替え時の入れ替え土壌	150～240 cm
Ⅱ層	近代～現代	黒色砂質土（白パミス混）	近代～現代の撹乱層	10～20 cm
Ⅲ層	近世1	黒褐色硬質土	造成面	30～50 cm
Ⅳ層		赤褐色砂質土（砂混）	鉄分沈殿層	10～20 cm
（グライ層）		黒灰色粘質土（部分堆積）		10～20 cm
Ⅴ層	近世2	褐灰色砂質硬質土（鉄分沈殿層）	造成面	10～20 cm
Ⅵ層	無遺物層	黒灰色～黄橙色砂	細かな砂層	―



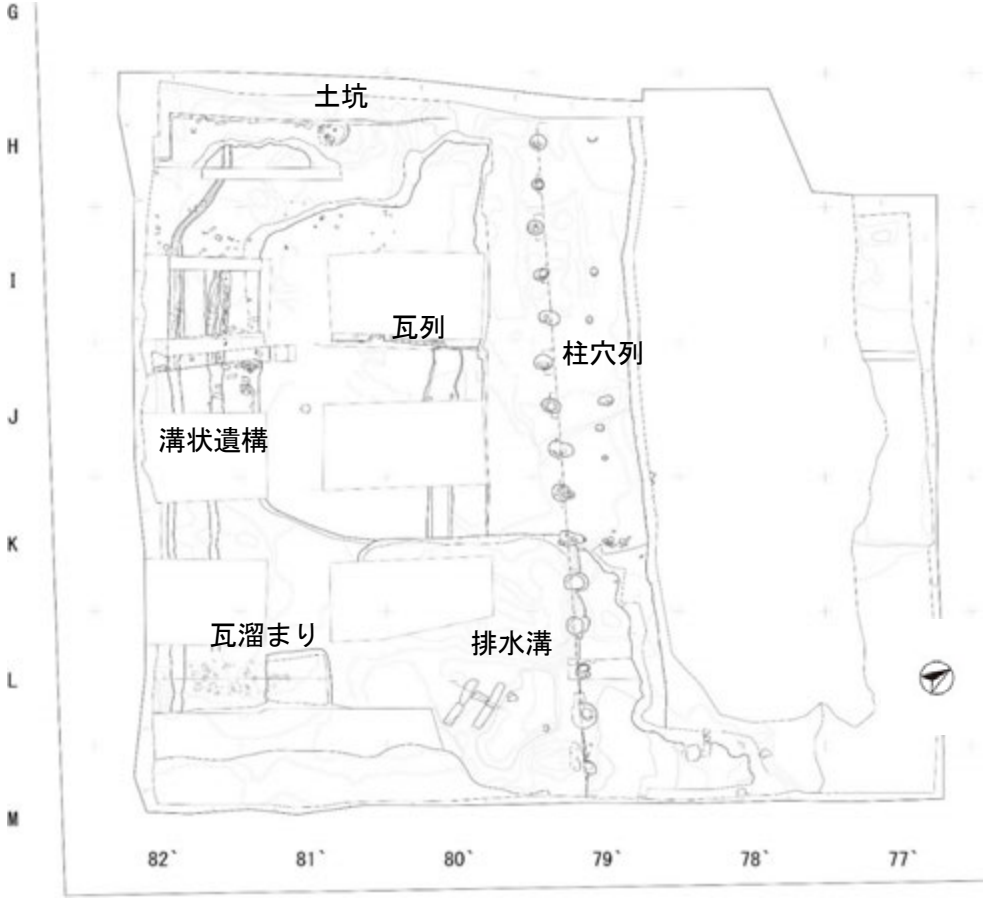


図４　発掘調査区の遺構

0　5 m

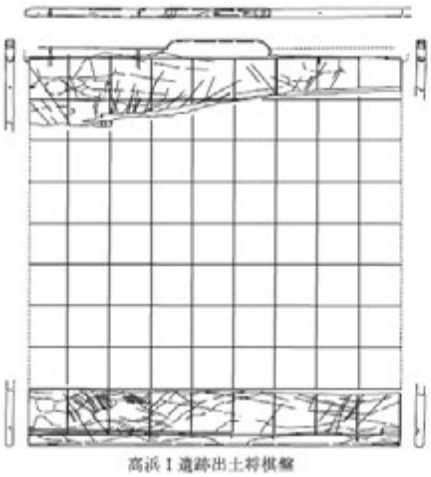
表２　鹿児島城二之丸跡の主な成果

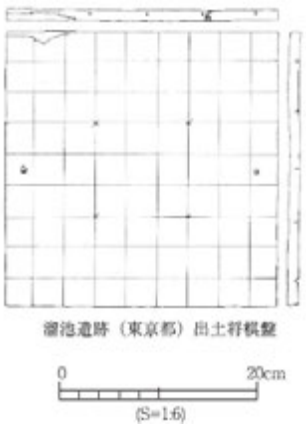
時期	主な遺構	遺物
近世	溝状遺構，柱穴列，土坑 瓦列（雨樋遺構か）	瓦，陶磁器（薩摩焼，肥前系，琉球），木製品（将棋盤か）
近世以降	石列，礎石，排水溝	瓦，陶磁器，土師器

５　注目される成果

(1) 将棋盤と考えられる木製品の出土

調査区の南西グリッド(H-81)の土坑から陶磁器や木製品が出土しました。なかでも木製品は自然科学分析の年代測定により，17 世紀以降の将棋盤と考えられ，発掘された将棋盤としては，全国で３例目の可能性があることがわかりました。将棋盤の出土例については，管見に及ぶ限り，現在のところ島根県高浜Ⅰ遺跡出土例と東京都溜池遺跡出土例のみで，前者は 15 世紀半ば～16 世紀初頭の中世の将棋盤で，現存する最古の出土例となります。後者は 18 世紀～19 世紀半ばの近世の将棋盤として報告されています。両者の将棋盤を比較すると両者とも小将棋（９×９のマス目）の盤であるが，後者は 10cm 程度小型という規模の違いが認められています（高浜Ⅰ遺跡報告書より）。将棋盤の製造については，近世以前には専門の職人は存在せず，木工職人や大工が行っていたと考えられ，将棋盤の定尺が定まったのも近世に入ってからとされています（増川宏一 1977）。今回出土した当遺跡のものは，定尺が定まった近世以降のものと考えられ，東京都溜池遺跡出土例と尺がほぼ同じものと考えられます。東京都溜池遺跡出土の将棋盤が 27.8×27.7cm のほぼ正方形の盤で厚さ 1.3cm と報告されています。当遺跡で出土した将棋盤も 27×27cm のほぼ正方形の盤で厚さ１cm であり，小将棋盤のマス目である９×９のマス目が木製品に刻まれており，将棋盤の脚と考えられる部材も一部出土しています。





（島根県高浜Ⅰ遺跡報告書）

【将棋のはじまりについて】

将棋もしくは将棋盤に関する近世以前の文献や絵図等の記録類は極めて少ないです。将棋の普及や変遷については，増川宏一氏によって検討されており（増川 1977・1985），それによると将棋の最古の記録は 11 世紀までさかのぼることができるようです。藤原行成の記した 11 世紀初頭の『麒麟抄』には，将棋の駒の書き方を記した部分があり，11 世紀中頃の藤原明衡の『新猿楽記』には，将棋のことが技芸の一つとして記されています。鎌倉時代の写本で遺されている『二中歴』には，将棋と大将棋の説明があり，ここで初めて当時の将棋の駒の名称や駒数，進み方，盤のマス目が明らかになっています。

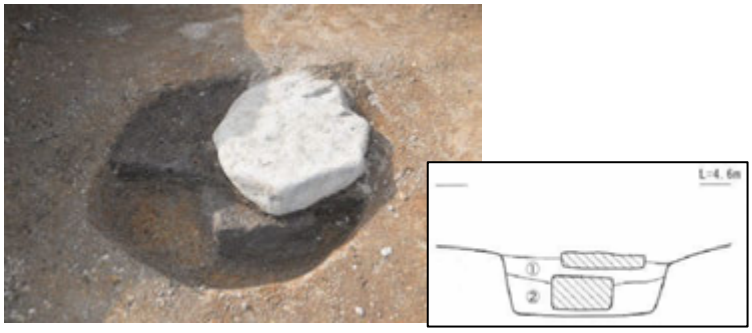
駒の出土例は，全国約 100 以上の遺跡で 500 点近く確認されています。その中で奈良県興福寺旧境内出土駒が現在最古の駒と考えられ，11 世紀半ばのものと推定されています。上述の文献等の年代や考古資料からみても，11 世紀代には将棋が存在していたことが言えるようです。

⑵ 境界の塀等と考えられる柱穴列

H-79～M-79 区のⅣ層上面から 15 基の柱穴からなる柱穴列を検出しました。調査区の西側端から東側端に１列に並んでおり，柱穴の直径は約 60cm～80cm です。柱穴には上に安山岩の根石があり，その約５㎝下に削り痕のある凝灰岩が柱穴の底面から検出されたものもあります。柱穴内からは約 16～18 世紀のものとみられる陶磁器が出土しています。根石のある柱穴を検出したため，建物跡の可能性を検討し，柱穴と同じ高さの面で横への柱穴の広がりを確認しましたが，検出することができませんでした。柱穴が１列になっていることと，控え柱のような小さな柱穴があったことから，建物跡ではなく何らかの境としての塀等の可能性が考えられます。

柱穴列検出状況

柱穴検出状況



柱穴検出状況

(3) 水利施設

I-80 区のⅢ層中から瓦列（雨樋遺構か）が検出されました。丸瓦を裏返して列状につないでおり，瓦の繋ぎ目には漆喰等は見られませんでしたが，瓦の隙間がほとんどなく，傾斜をつけた粘土層の土の上に列をなしていたことから，雨水等を流す雨樋遺構のようなものではないかと考えられます。L-79～80 区では，凝灰岩の長方形の切石を組み合わせた排水溝が，北西を向いて検出されています。切石との間には敷石とみられる石も検出されました。H～K-81 区の溝状遺構にも水が溜まったような痕跡がみられ，瓦や木片などが出土しました。

また，今回の発掘調査に伴い県文化財保護審議会会長の本田先生と国史跡鹿児島城跡保全整備専門家検討会議委員長の故三木先生にもご指導をいただき，調査は遺構の有無を確認した後，建設される建物の工事の影響を受けない箇所及び深さについては，土木シートと土嚢で保護措置をとって埋め戻しています。

瓦列（雨樋遺構）検出状況

切石の排水溝検出状況

溝状遺構検出状況

遺物（瓦）出土状況

調査指導（三木先生：写真右側）

工事の影響を受けない部分の保護状況

参考文献

『高浜Ⅰ遺跡報告書(2011)』,『溜池遺跡報告書(1996)』,『将棋Ⅰ・Ⅱ(増川宏一 1977, 1985)』

メモ

諏訪ノ前遺跡の整理作業成果

（阿久根市波留）

（公財）埋蔵文化財調査センター　文化財専門員　松山初音

1　はじめに

（公財）埋蔵文化財調査センターでは，南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴い，阿久根～西目 IC 間の発掘調査を令和２年度から開始しました。令和５年度までに北山遺跡，新城跡，諏訪ノ前遺跡の調査を行いました。令和６年度は，発掘した成果を報告書にまとめるための整理作業を行っています。今回は，整理作業をする中で分かったことについて報告します。

2　遺跡の位置と環境

諏訪ノ前遺跡は阿久根市波留に所在し，高松川左岸の台地上から緩やかにくだる標高約 35m～30mの斜面上に位置します。遺跡の東側には愛宕山があり，中世莫祢氏の本拠地である阿久根城が築かれたといわれています。その西麓の山下から波留にかけての台地上には中ノ城跡，新城跡，大石城，小田城跡，賀喜城跡などの山城が点在していました。

莫祢氏は，平安時代末期から旧阿久根地区を支配しており，九代良忠から薩州島津家初代好久の家老となり，以後十四代良照まで続きます。なお，九代良忠のときに家名を「莫祢」を「阿久根」に改姓しており，薩州島津家初代好久も莫祢を所領とするにあたって地名を「阿久根」に変更しています。

また，遺跡の北西約 100mの地点に，波留南方神社があります。暦応年間（1338～1342 年），莫祢氏五代成友が，薩摩国高江郷雲田に鎮座していた諏訪社を阿久根に勧請奉斎したと伝えられています。さらに天文 16（1547）年，阿久根良正が薩州島津家当主である島津實久，義虎とともに波留南方神社を再興したといわれています。

図１　諏訪ノ前遺跡位置図・空中写真

３　主な調査成果

諏訪ノ前遺跡では，縄文時代及び古墳時代～近世・近代の遺物，中世の遺構が確認されました。現段階で確認されている遺物や遺構は表１のとおりです。

(1) 縄文時代（約 10,000 年前～約 3,000 年前）

遺構は確認できず，遺物も少ないです。縄文土器や石器が出土しています。土器の少なさに対し，石器は一定数出土しています。

(2) 古墳時代（約 1,700 年前）

遺構は確認できず，古墳時代前期に該当する土器が出土しています。

(3) 古代（約 1,200 年前）

遺構は確認できず，土師器や須恵器などが出土しています。

(4) 中世（約 700～400 年）

本遺跡の成果の中心となる時期であり，多くの遺構や遺物が確認されています。遺物では中国との交易を知ることができる陶磁器や，瓦のような質感の摺鉢・火鉢（いわゆる瓦質土器）が多く出土していますが，特徴的なのは，懸仏（かけぼとけ）の本尊（ほんぞん）や五輪塔（ごりんとう）（墓）の水輪（すいりん）などの宗教的な意味合いを持つ遺物が出土していることです。さらに，遺構も数多く検出されており，溝状遺構や掘立柱建物跡，炉跡などが検出されていますが，大きな成果は「トイレ遺構」が確認できたことです。

(5) 近世以降（約 400 年前～200 年前）

遺構は確認できず，国内外の陶器や肥前を中心とした磁器が出土しました。また，獅子香炉（ししこうろ）と考えられる脚部（きゃくぶ）や，三河内（みかわち）人形と考えられる人物像の足元など，特徴的な遺物も見られます。

表１　諏訪ノ前遺跡出土遺物・遺構

時代	遺物	遺構
縄文	曽畑式・市来式・西平式・上加世田式・三万田式土器（計９点），石鏃，石斧，磨敲石	－
古墳	成川式土器（東原式，笹貫式）	－
古代	須恵器，土師器，紡錘車，土錐	－
中世	須恵器，土師器，中国磁器（青花・青磁・白磁），陶器（備前（びぜん）・常滑（とこなめ）・国外），瓦質土器，土錐，掛仏本尊，洪武通宝，砥石	掘立柱建物跡５軒，竪穴建物跡１軒，土坑 17 基，トイレ遺構６基，溝状遺構２条，道跡１条，礫集中２箇所，ピット 221 基，炉跡 21 基，段状遺構２箇所
近世以降	陶器（薩摩焼・備前等），磁器（肥前（ひぜん）・関西系），土製品，青磁獅子香炉脚部	－
時期不詳	土製品，石製品，鉛玉	－

4　注目される成果

諏訪ノ前遺跡では，前述のように中世の遺構や遺物が豊富です。その中でも，整理作業の中で分かってきた重要な成果について，遺物と遺構に分けてご紹介します。

(1) 遺物

中世の遺物で特に目を引くのは，懸仏の本尊，五輪塔の水輪です。懸仏の本尊は，包含層とシラスが混ざった層を掘り下げている際に出土しました。時期は 14 世紀ごろと考えられています。風化していて細部までは確認できませんが，左手を胸元あたりに上げて右手は下げている様子や，蓮（はす）の花を簡易的に表現したような線刻が見られます。後ろには，鏡に取り付けるための輪があります。水輪は，溝状遺構の中に礫を集中して捨てたような場所があり，そこから礫と混ざって出土したものです。様々な石が多く混ざる溶結凝灰岩（ようけつぎょうかいがん）を加工しています。鑿（のみ）痕が確認できる範囲がありますが，文字や記号ではなさそうです。

遺跡の近くに波留南方神社があることからも，これらの遺物と神社は関連性があると考えられます。また，懸仏の時期が神社の勧請された時期と合うことも注目されます。

重要文化財：聖観音懸仏

（東京国立博物館デジタルコンテンツから引用）

写真１　諏訪ノ前遺跡出土懸仏本尊及び実測図（左）・参考全体写真（右）

写真２　諏訪ノ前遺跡出土水輪（左）・水輪出土状況（右）

(2) 遺構

特徴的な遺構としてトイレ遺構（以下トイレ）があり，６基確認されました。見つかった地点は調査区の西側に集中しています。規模は 80cm～160cm の円形で，深さは 64cm～140cm あります。トイレの中に入っていた土は暗褐色で，粘性がある点が共通します。年代測定の結果，14 世紀ごろ（鎌倉時代～室町時代）であることがわかりました。

トイレか普通の穴かを見分ける手がかりとして，科学分析を４基のトイレの内の土で行いました。すると，１基のトイレで寄生虫卵や植物の種が確認されました。寄生虫卵が見つかることは，「うんち」が中に入っていた可能性が高いことを示します。また，植物の種はヤマモモやキイチゴという種類で，それらは当時食べていたと考えられます。さらに，貝の蓋（ふた）もトイレの土の中から見つかりました。他のトイレの土からは，アブラナ科やソバ属の花粉も大量に見つかりました。これらは，食べ物由来と考えられるため，当時の人たちが何を食べていたかを知る手がかりになります。

これまで，トイレの可能性がある遺構は県内の発掘調査でも報告がありました。しかしながら，寄生虫卵分析など科学的な分析によりトイレと裏付けされた遺構が確認できた初めての事例となりました。

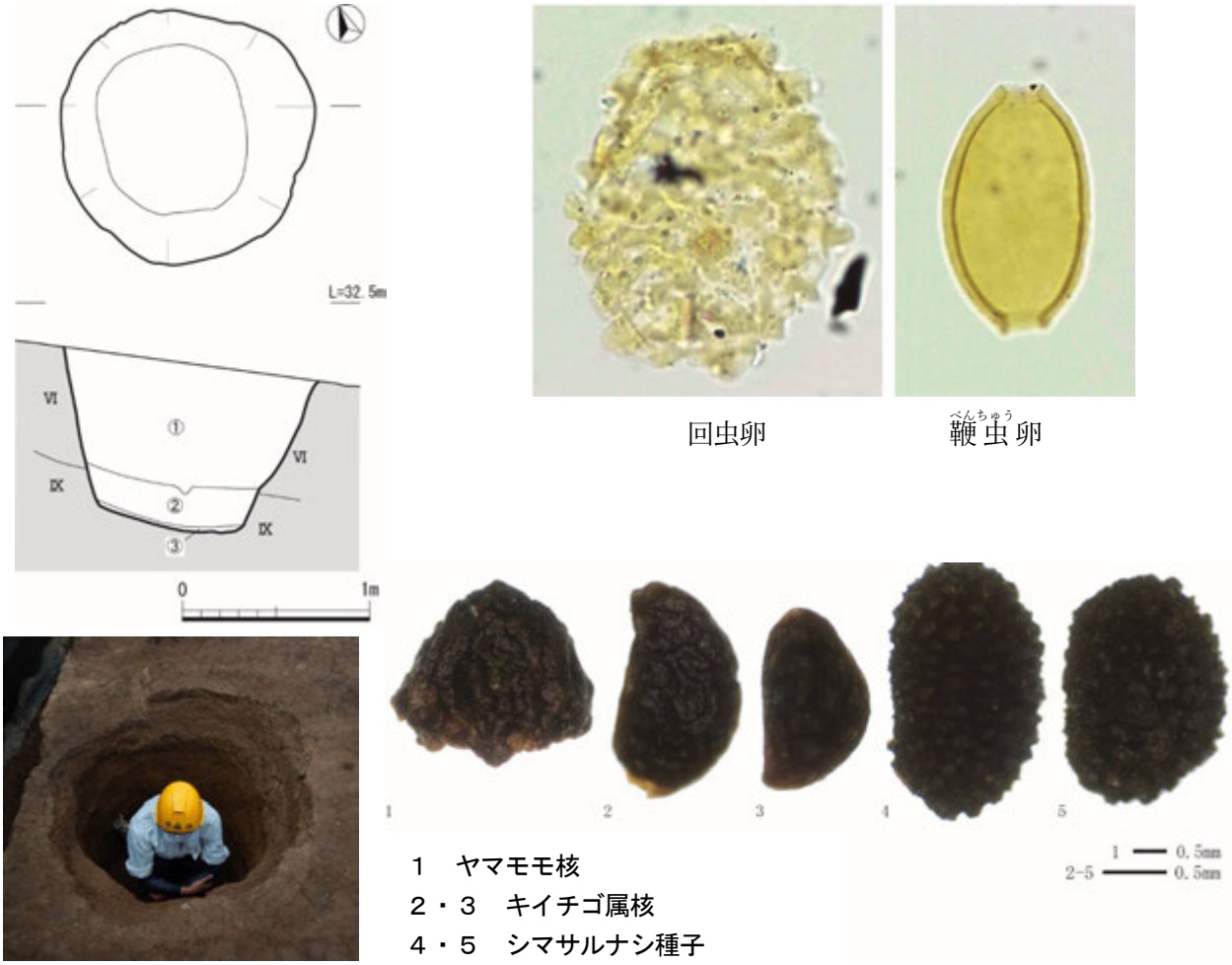


図２　トイレの図面（左上），トイレの状況（左下），寄生虫卵（右上），種実（右下）

南の縄文文化魅力発信事業

県立埋蔵文化財センター　第一調査係長　平　美典

１　はじめに

昨今，縄文ブームだと言われています。2018 年に東京国立博物館で開催された特別展『縄文－１万年の美の鼓動』には，２か月で 35 万人を超える人が訪れ，縄文をテーマにしたムック[注1]なども多数作られています。最近では，令和３年に「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録されたことで，さらに，縄文文化への興味・関心が全国的に高まっています。上野原遺跡を代表とする鹿児島の縄文時代の遺跡についても，北海道・北東北の縄文遺跡群（北の縄文文化）と対比され，縄文文化がいち早く花開いた九州南部の縄文時代の特色が，南の縄文文化として注目されています。

一方で，埋蔵文化財保護行政で実施される発掘調査は，その大部分が開発に伴う緊急発掘調査であり，限られた予算と期間内で必要最小限の整理作業を行い，記録保存のための報告書を作成します。発掘調査で出土した出土品の多くは，破片で収蔵庫に収蔵されている状況であり，報告書刊行後，十分に活用されているとはいえない状況でした。

当センターではこのような状況を踏まえ，これまで十分に活用されてこなかった資料を中心に，新たな活用のための資料として再整理するとともに，北の縄文文化に負けない，南の縄文文化の魅力を発信するための取組みを今年度からはじめました。今回は，その南の縄文文化魅力発信事業でも取組みについて紹介します。

※注１　ムック（mook）：雑誌と書籍をあわせたような刊行物。magazine（マガジン）と book（ブック）の混成語

２　事業の目的と内容

主な事業の目的と内容は以下のとおりです。

(1) 上野原遺跡を代表とする南の縄文文化について，これまで十分に活用されていない出土品を再整理し，それらを修復・復元して新たな活用素材とします。今年度は上野原遺跡と加栗山遺跡の資料を中心に作業を行っています。また，整理作業の成果によっては，将来的な文化財指定の契機とします。

(2) 郷土教育の観点から，実物の出土品を効果的に活用した出前授業（ワクワク考古楽）を行うことにより，郷土の歴史への関心を高め，郷土を誇り，郷土を愛する心の醸成を培う契機とします。今年度は 12 月時点での予約を含めて，18 校から申し込みがあり，約 800 人の児童・生徒が南の縄文文化について学びました。

写真１　出前授業（ワクワク考古楽）の様子

(3) 修復・復元した資料等を展示・活用することで，南の縄文文化の魅力を発信します。今年度は，これまでに以下の展示を実施しました。

No.１	県立埋蔵文化財センターロビー展示	常時	
No.２	霧島市シビックセンターミニ展示	常時	縄文の森コーナーを一部借用
No.３	鹿児島空港パネル展	６月４日～ ７月 19 日	上野原縄文の森と共催

また，今後以下の展示を実施する予定です。

No.１	伊集院地域文化祭出張展示
会期	令和６年１１月３日（日）
会場	日置市伊集院文化会館　（日置市伊集院町郡１丁目１００）
内容	県立埋蔵文化財センターが調査した日置市伊集院町出土の縄文土器などの展示
主催	伊集院地域文化協会
No.２	企画展　「解明進む　志布志の縄文文化（仮）」展
会期	令和６年１２月４日（木）～令和７年２月２日（日）
会場	志布志市埋蔵文化財センター　（志布志市志布志町安楽４１－６）
内容	県センターが調査した志布志市出土資料の展示（縄文時代を中心に）
主催	志布志市教育委員会

写真２　鹿児島空港パネル展の様子

(4) 東京事務所などと連携し，鹿児島の文化財の魅力を県外へ発信することで，新たな観光客の誘致へとつなげます。今年度は，上野原縄文の森と共催で，東京のかごしま遊楽館で南の縄文文化展を実施します。

図１　南の縄文文化展チラシ

３　おわりに

当センターでは，これからも，北の縄文文化に負けない，南の縄文文化の魅力を発信するための取組みを進めて参ります。県立埋蔵文化財センターの今後の活動にご期待下さい。

メモ

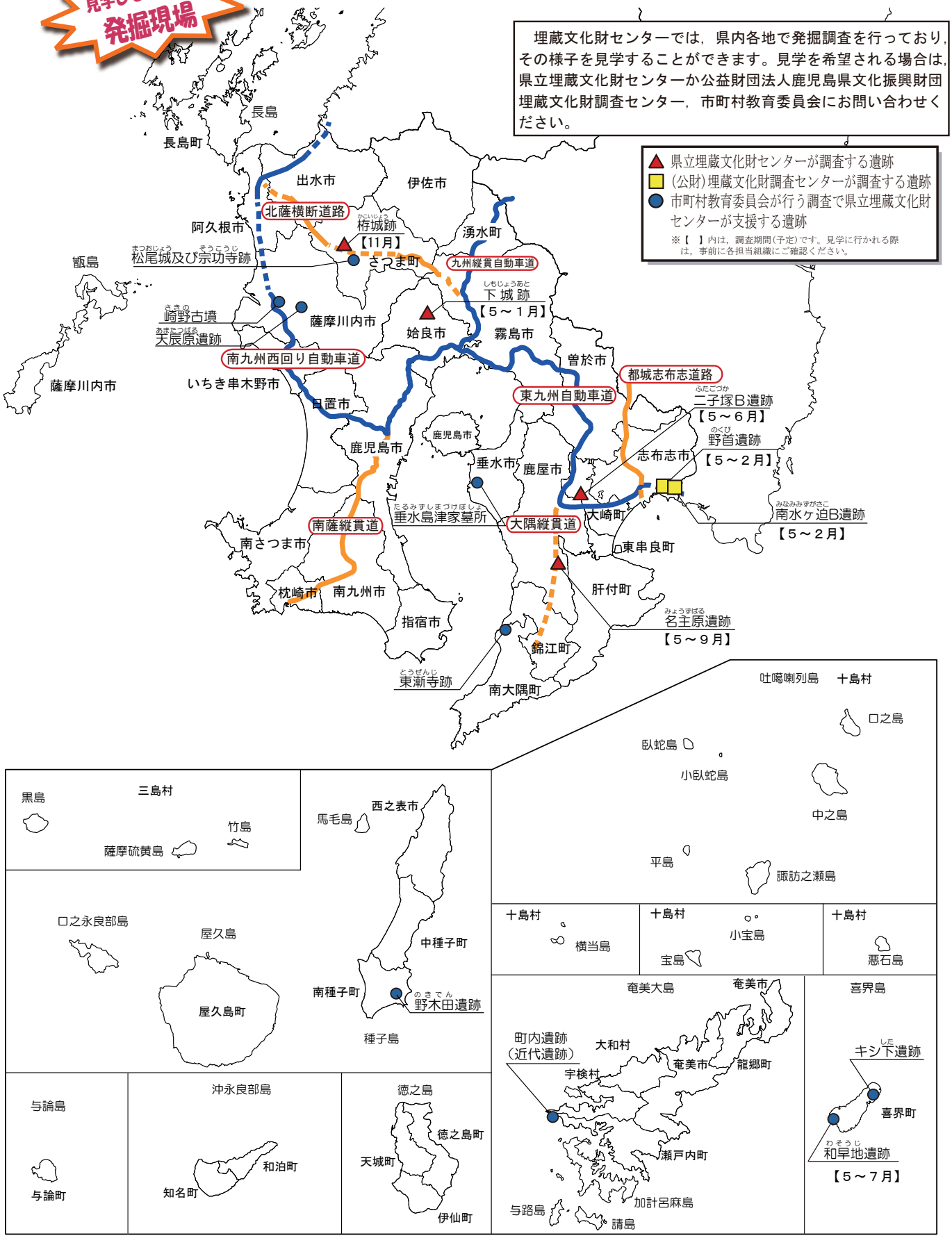
遺跡や遺物を３Ｄ・AR 体験

※　QR コードをスマホやタブレットで読み込むと，画面に表示できます。
※　スマートフォンや OS のバージョンによって，表示できないことがあります。
※　AR 体験は「STYLY」というアプリのインストールが必要です。

名称	３Ｄ	ＡＲ
上野原台地 	上野原台地　上野原台地　上野原台地　上野原台地　上野原台地　上野原台地	
鬼瓦（鹿児島跡） 鹿児島城跡の発掘調査で見つかった鬼瓦です。この鬼瓦をもとに、御楼門の鬼瓦が復元されています。当時も屋根の上から城下を見守っていたのでしょうか。	鬼瓦（鹿児島城跡）　鬼瓦（鹿児島城跡）　鬼瓦（鹿児島城跡）	
溝状遺構（名主原遺跡） 鹿名主原遺跡は，鹿屋市にある弥生時代から古墳時代の遺跡です。直径約 20 メートルの溝に囲まれた墓とみられ遺構も見つかり，県内最古級の古墳の可能性があります。	名主原遺跡溝跡（完掘）　名主原遺跡溝跡（完掘）　名主原遺跡溝跡（完掘）	
排水溝遺構 （鹿児島城二之丸跡） 今回のフォーラムで紹介した，凝灰岩でできた石組遺構です。長方形の石を組み合わせ，排水溝として利用したと思われます。		
木製装飾品 （六反ヶ丸遺跡） 今回のフォーラムで紹介した，弥生時代の木製装飾品です。用途は不明ですが，細かな加工が施されています。	六反ヶ丸遺跡出土木製品　六反ヶ丸遺跡出土木製品　六反ヶ丸遺跡出土木製品	

令和６年度 発掘調査予定遺跡

見学してみない？
発掘現場

埋蔵文化財センターでは，県内各地で発掘調査を行っており，その様子を見学することができます。見学を希望される場合は，県立埋蔵文化財センターか公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター，市町村教育委員会にお問い合わせください。

▲ 県立埋蔵文化財センターが調査する遺跡
■ (公財)埋蔵文化財調査センターが調査する遺跡
● 市町村教育委員会が行う調査で県立埋蔵文化財センターが支援する遺跡
※【　】内は，調査期間(予定)です。見学に行かれる際は，事前に各担当組織にご確認ください。